

新年を迎えて

農林水産省農業環境技術研究所 ^{たま}玉 ^き木 ^{よし}佳 ^お男

1995 年を迎え、読者の皆様に新春のお慶びを申し上げます。

今世紀も残すところあと 5 年となり、21 世紀に向けての最後の時を刻みつつあるという実感がひとしお強く感ぜられます。というのも、いろいろな意味で「21 世紀をめざして……」という言葉がこれまで使われていたわけですが、いよいよこれが目前に迫ったということです。

一昨年の大冷害が、昨年は一転して高温、干ばつの年となり、農業に関連する技術の開発にかかわるものにとっては、大変気になる最近の気候変動ですが、一部の専門家によれば、こうした気候変動も、今問題となっている地球規模の環境変化と深いかわりがあるともされております。

人口の増加に伴う人間活動の高まりによって、大気中の二酸化炭素をはじめとした温室効果ガスの濃度の上昇とこれによる地球の温暖化、土地の荒廃と砂漠化、土壌の侵食と表土の流亡、熱帯林の破壊と野生生物種の減少、大気汚染と酸性雨による森林の衰退などが懸念されております。わたしたちは、この文明社会の快適な生活を享受するなかで、まさに地球の資源を確実に食いつぶしつつあるといえるでしょう。経済大国となったわが国ではグルメといわれる食生活を楽しんでいますが、その実態はわたしたちの生存のために必要なカロリーの半分以上を、輸入食品に頼っているというありさまです。

増加しつづける人口と、これを養うための食料生産は、10 年ほど前を転機として状況が一変し、もはや人口の増加に追いつかないという兆候をみせているとされています。ワールドウォッチ研究所のレスター・ブラウンは、最近の「地球白書」の第 10 章を自ら執筆し、1984 年を食料生産の急成長時代から低成長時代への移行の転換点とし、わたしたちが「地球規模の食料危機」に直面しつつあることを指摘しています。わたしたちは、もはや経済効率優先の考え方と、わたしたち自身のライフスタイルをじっくりと見直すときにきているといえるでしょう。

新年早々、いささか暗い話題となってしまいました。が、農業技術の開発にかかわりのある人間としては、未来に大きな夢を描きながら技術開発をしているわけから、バラ色の未来を信じることができそうな条件を整えていく努力が必要です。

原始の人は、農耕の技術を発達させることで人間社会と地域の文化をつくり、今日の文明社会をつくってきたわけ。古来からの伝承は、人と自然との調和の大切さを教えるものが多く、1 万年といわれる農業の営みは自然の生態系への思いやりをこめた技術によって続けられてきたはずであり、そこには自然環境を合理的に管理する技術が凝縮されているはず。環境を管理する技術としての農業技術という側面が忘れ去られてきたわけですが、ごく最近になって、ガット・ウルグアイ・ラウンドにいたる論議とその後の展開のなかで、ようやく農業のもつ外部経済効果や、生産性以外の多面的機能を見直すという動きがあります。しかし、まだまだ十分とはいえません。

爆発する世界の人口は、食料確保への営みとしての農業の重要性を改めて認識させているわけですが、自然環境を管理することで成り立っている農業は、今問題となっている地球規模の環境問題とまさに表裏一体の関係にあります。農業自体が環境への負荷を与えているかぎり、農業が本来もっている生態系の制御技術にもとづいた環境管理のノウハウを未来に向けて生かすことも難しくなるでしょう。

本誌、「植物防疫」のテーマである農作物の病虫害防除の分野では、害虫防除を中心に総合的害虫管理 (Integrated Pest Management, IPM) という考え方が発展してきました。この考え方は現在、総合的病虫害雑草管理という考え方に発展しつつあります。こうした考え方をさらに一歩も二歩も進めて、総合的農業環境管理システムの構築に向けて展開させることが、21 世紀をのりきるための農業技術に求められていると思われます。こうした意味から、植物防疫分野の技術開発は、今後の農業技術をリードする位置にあることを自覚するとともに、総合的管理の、より具体的な実践が望まれることとなります。

1995 年の年頭にあたり、読者の皆さまのますますのご発展をお祈り致します。